

# 日本トランスパーソナル心理学/精神医学会の創立をめぐって

長岡造形大学助教授 菅原 浩

1998年10月11日、日本トランスパーソナル心理学/精神医学会が正式にスタートした。これは日本で初の本格的なトランスパーソナル心理学やその隣接領域に関する専門的学術団体となる。会長には、『瞑想と精神医学』などトランスパーソナル心理学の学問的な著書もある東京医科大学の安藤治氏が就任した。

トランスパーソナル心理学、あるいはトランスパーソナルというコンセプト自体は、決して新しいものではない。すでに30年の歴史のあるものである。日本で紹介され始めてからでも、20年以上になる。しかし今まで、アメリカのトランスパーソナル心理学会にあたる学術組織が日本では生まれていなかった。というのも、長い間、日本におけるトランスパーソナルの普及は主に民間の翻訳者の努力によるものであって、大学などの専門研究者は大勢としてこれを無視する傾向が強く、これは学問的ではないとする風潮もかなり見られたのである。今なお、アカデミズム内部ではトランスパーソナル心理学に対する警戒の眼が根強くあり、これを研究しようとする者にはなお逆風の状況である。日本トランスパーソナル心理学/精神医学会を創立したのは、トランスパーソナルという立場の学問的認知へむけての第一歩と位置づけられる。一般の人々への啓蒙も重要なことではあろうが、まずはトランスパーソナル心理学・精神医学の学問としての地歩の確立、そして学問的レベルの議論が成立するような環境を作ることが、この学会の第一に目的とするところである。

アメリカでは、カリフォルニアを中心に、トランスパーソナル心理学によって修士号や博士号を取得できる大学院がいくつかある。たとえば、California Institute of Integral Studies, Institute of Transpersonal Psychology, John F. Kennedy University, California Institute for Human Scienceなどがあげられる。特に最初にあげたCIISにはかなりの多数の日本人留学生が行っている。これは当然、日本にはそれを学ぶ大学・大学院が全くないという状況のためであろう。このような組織が日本で生まれるのはまだ先の話かもしれないが、この学会の創立はそのための道をつけることにもなろう。

これまで、日本には専門家としての「トランスパーソナル心理学者」が皆無な状況で、翻訳された本のみをもとにトランスパーソナル心理学をとらえ、論じているという傾向があった。一部には、トランスパーソナル心理学とはケン・ウィルバーの思想とイコールなものだと考えたり、あるいはグロフのような変成意識を促す特殊な技法を用いるもの、というイメージがかなり広まっている。しかし、もちろんそれはトランスパーソナル心理学の一部ではあるけれども、すべてではない。特にウィルバーと臨床的なトランスパーソナル心理学者の間にはある程度距離が生まれつつあるのが現状である。アメリカで教科書的に使われているTextbook of Transpersonal Psychiatry and Psychologyという本を見ると、フロイト、ユング、マズローといった心理学者から、ヨーガ、仏教といった東洋的伝統との関連、具体的な心理臨床への応用から、催眠、瞑想などときわめて広範囲の話題がとりあげられており、現在のトランスパーソナルの幅の大きさを実感させる。

アメリカでのトランスパーソナル心理学は、精神科医や臨床心理家への地道な形で定着、という段階に入っている。そうした人々が日々の臨床の中で、たとえば技法の一つとしてクライアントに瞑想を勧めたりする、という形が一般化している。また現在のアメリカでは瞑想の文化が日本よりも発達している部分もあり、瞑想研究が学問的にも中心的位置を占めている。アメリカの状況は、日本におけるトランスパーソナルの理解の仕方とはかなり違っているのである。日本では、トランスパーソナルについての偏ったイメージをもとに、その是非を論じるような議論が多いようである。

もちろん、トランスパーソナルとは、ここ数十年のアメリカ西海岸を中心とした文化を背景としており、そこにおける東洋文化影響を通過しているという意味で、アメリカ独自の文化的産物であることは確かであり、それをそのまま日本に直輸入することはない、というのは正当な議論である。しかし、アメリカvs日本という発想もまた不毛なものであろう。どのような学問でもローカルな環境から出発し、どの程度「普遍」に達しうるかで勝負をしてい

くものだ。トランスパーソナルは、人間の中の霊的なものを公式的世界観の中に含まない「近代」という時代の制約を乗り越え、21世紀の世界観・人間観を模索する試みとして生まれてきた。つまり、トインビーが言う意味で、近代という文明に対する「挑戦」があり、その一つの「応答」としてこれが生まれてきたのである。日本もすでに、少なくとも学問や科学のような領域では、近代という洗礼をすでに経過してしまっている。その中で、近代的世界観では排除されてきた人間の精神的・霊的な側面を学問的にも体験的にも追求していきたいという欲求は、かなり強く見出されるはずだ。そういう「挑戦」に我々なりの解答を見出すためにも、トランスパーソ

ナルというコンセプトは現在の出発点として有用なものである。おそらく、日本においては、自分たちの伝統を深く掘り起こすことを通して、トランスパーソナルのコンセプトをさらに幅広く、深いものにすることが求められていくであろう。そこで、人体科学会が追求してきた「気」のコンセプトとどのような接点が見出されるかということも、きわめて関心を持たれるところだ。今後の学問的交流に大いに期待したいものである。

●日本トランスパーソナル心理学／精神医学会事務局  
〒194-0004 東京都町田市鶴間371 飛鳥病院内  
TEL: 042-795-2080 FAX: 042-799-4573

## 人体科学会 第8回年次大会に出席して

長岡短期大学教授 定方 昭夫

1998年11月14日・15日と奈良は天理市にある天理大学にて、第8回年次大会が開催された。

1997年の新潟県長岡市での年次大会について地方での大会は2回目であるが、関西においての開催は初めてであるという点で大きな意義があったといつてよいであろう。

大会第1日目の午後の日程は藤波襄二会長の挨拶から始まった。会長就任後初めての大会ということで学会運営にかける会長の意気込みが感じられた。

公開講演が二題、まず3月迄天理大におられて4月に奈良女子大に移ったばかりの森岡正芳先生による「対話する身体—カウンセリングの現場から—」と題するお話を伺った。カウンセリングにおける対話そのものが全身活動なのであるという観点は人体科学の研究に携わる方々にとって資するところが多かったといつてよい。

次いで登場されたのは、学会ではおなじみのカール・ベッカー先生である。

流暢な日本語で「癒しの風景—日本的な治療の歩み」なるお話をされた。講演はパフォーマンスでなければならないという持論通り熱のこもったお話であった。「死の教育」で著名なデーケン先生が御病氣とのことでベッカー先生は近年益々講演にお忙しいとのことであるが、1999年7月の人体科学会公開講演会の演者として御無理を願うことにした次第で

ある。

次に天理大学での大会ということで特別に、天理図書館で「人体科学会」向けに同館所蔵の貴重で珍しい古医学書・古武道書等が展示され、2階の陳列室で閲覧することができた。同図書館の収書の質は定評のあるところであり、優秀な「(図書)館屋」さん達が同館を支えてきたと伝え聞く。

展示品の主な所を紹介すれば、華岡青洲自筆の「乳巖治験録稿本」、森嶋外自筆「性欲雑説」、曲直瀬玄朔著「延寿撮要」等である。特に貴重と思われたのは、「抄録集」の表紙にも使われた、重文の「薬種抄」である。密教の修法に使われた漢方薬物が、中国の本草書にならった図入りで解説された写本で、千年以上も前のものであるが、だいぶ気に入っていると見受けられた。

さらに、大会委員長の池田士郎先生が、遠路はるばるいらした学会員のためにと趣向を凝らして用意して下さったのが、天理大学雅楽部による、雅楽と舞楽の鑑賞である。

宮内庁雅楽部に次ぐ実力を有するとされるだけあって、夕闇せまるキャンパスでの、雅やかな演奏と遙けき昔の異国を偲ばせる舞いには、参会者一同を酔わせるものがあつたといつてよい。

大会初日を締めくくったのは、大学食堂での懇親会で、普段交流の機会の少ない、会員相互の親睦の